

特集 「言葉」をめぐって  
- 加賀野井秀一の言語ワンダーランド -



※「日時計の世界」

● CONTENTS

- 特集 「言葉」をめぐって-加賀野井秀一の言語ワンダーランド-  
理工学部教授 加賀野井秀一
- 図書館さんぽ 第9回 「世田谷文学館」
- 新収資料紹介 中央大学教職員著作目録・資料目録（2009.1～2009.8 収集分）
- Information 中央図書館工事に伴う臨時閉館について
- 巻末エッセー 「日時計とロゼッタ・ストーン -小原銀之助と中央大学多摩校地-」  
図書館長 見市雅俊

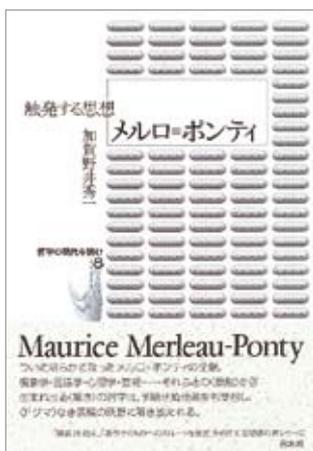
# 「言葉」をめぐって

— 加賀野井秀一の言語ワンダーランド —

理工学部教授 加賀野井 秀一



「言葉って何だろう？」と問われて、あなたならどう答えるだろうか。これまでの私の経験からすると、返ってくる答えのほとんどは「コミュニケーションの手段である」というものだった。もちろん、そこにはいささかも間違いはないのだが、こうした考え方の中には、実は、言葉の本質を捉えそこねてしまうかなり危険な陥穽がひそんでいる。



ここでは、あらかじめ個々人が頭の中で物事を考え、それを相手に分らせようと、二次的に言語化するのだということが前提されていると言っている。だが、本当にそうだろうか。むしろ私たちが頭の中で考える時、すでに言葉はそこに介入しているのではないだろうか、と、そんなことを詮索し始めると、もう大変。そこには、言葉抜き思考というものがあるのかどうか、哲学的な大問題が提起されてくるのである。

なるほど、画家は色で考え、音楽家は音で考えと言われるし、犬にも猫にも、彼らなりの考えはあるだろう。私たちだって、目の前に障害物が現われたら、とっさに身をかかわすのは必定で、これをしも身体的な思考と呼んだとて、そこに何ら不思議はない。けれども、

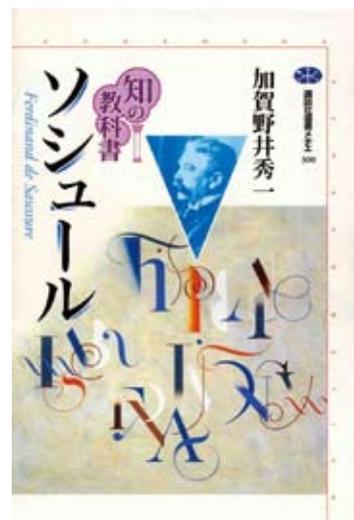
もう少し考えていただきたい。「きのう私はカレーライスを食べた」という事実を想起するような時、私たちは果たして、言葉なしの思考ができるのかどうか。

画家ならば、カレーライスを食べている自分の姿を描くことはできる。だが、それが「きのう」であることをどうやって表現するのだろうか。音楽家は、カレーライスの「美味さ」や「辛さ」の等価物を音によって再現できるかもしれないが、それが「カレー」であったり「味」であったりすることを示すのはおぼつかない。ましてや、犬・猫については言わずもがな。

つまり、時間性のようなものは、言葉以外の何ものによっても考えられはしないし、「愛」や「人権」や「道徳」などの観念ともなれば、言葉なくして思いつかれることすらあり得ない。ことほどさように、私たちの「記憶」も「歴史」も「文化」も、すべては言葉の膨大な蓄積の上に成り立っているわけだ。そうなるに結局、言葉とは、コミュニケーション手段などというところをはるかに越えて、思考の道具であるとともに、思考そのものでもあるということになってくる。

だとすれば、思考の道具である言葉が違えば、思考そのものもまた違ってくるのが道理というもの。日本語で考える私たちと、英語やフランス語で考える人々との間では、おのずと世界観も変わってくるだろう。これはまさしく、「翻訳」の問題や「異文化コミュニケーション」の問題にも繋がってくるはずだ。

たとえば、日本語では「学生さんがやってきた」と言って何の不都合もありはしないが、英語にしようとする、とたんに問題が起こってくる。「学生」は単数“student”なのか複数“students”なのか。いや、そればかりではない。これをフランス語にでもし



ようとするれば、男性“un étudiant”なのか女性“une étudiante”なのかさえ決める必要が生じてくる。つまり、同じように世界を眺めていても、英米人は単数が複数かを常に見分けていることになるだろうし、フランス人はさらに男性か女性かを分けていることになるわけだ。

これを一般化するならば、私たちは依拠する言葉に応じて、世界を別様に「切り取っている」と言ってみてもいい。日本語の「山」とフランス語の“montagne”とは、厳密に言えば、似て非なるものである。「事件は山場をむかえた」と言うことはできるが、「montagneをむかえた」とは言えないだろう。あるいはまた、日本語の「目」と英語の“eye”も同じものとは言いがたい。なにしろ、英米人の間では「目が利く」ことも「目が高い」ことも「目にかける」こともなく、ましてや「目に入れても痛くない」などということはありませんからである。

こうした独自の世界の切り取りは、それぞれの言葉の中に集積され、やがてそれらの特徴が民族性を育てあげることにもなるだろう。「すみません」「よろしくお願ひします」「おかげさまで」といった特殊日本的な物言いは、そのあたりに由来しており、とりわけ欧米的な言葉には翻訳しがたいものとなる。また、“Don't you know ~?”と問われる否定疑問文に対し、イエスやノーが逆になりがちなのは、そんな会話の最

中に、ふと相手の意向を「配慮」する自分自身の特性に気づくことにもなるだろう。

とはいえ、日本語は、和洋折衷の日常生活を送るわれら日本人さながらに、これまでおびただしい量の外国語からの影響を受けてきた。とりわけ、四世紀ごろに受けた中国語からの影響と、幕末・明治期に受けた欧米語からの影響は顕著である。この二期を通じて日本語の中には、それぞれ、表記法や近代思想が根をおろすようになるわけだが、いずれの場合にも、それらの外国語を日本語の内に取り入れてきた先人たちの工夫には、驚くべきものがある。

こともあろうに、日本語とはまったく異質のシナ・チベット語族に属する中国語をこねくりまわしながら漢文訓読ができるようにしたり、漢字を換骨奪胎して平仮名や片仮名まで作ったり、今では、アルファベッ



トさえ縦書きにして自家菜籠中のものとする始末。ア  
クロパティックと言わずして、何と言おうか。もちろ  
ん表記法ばかりではない。近代的な概念が不足してい  
れば、欧米語を新造漢語によって訳し、これまた日本  
語の富として繰り込んでいく。そこには日本語が、概  
念本体を「テニヲハ」で繋いでいく「膠着語」であっ  
たという偶然が功を奏してもいるわけだが、とにかく  
わが先祖たちは、それまでの日本語にはなかった概念、  
“society”を「社会」「philosophy」を「哲学」と訳し、  
「社会は哲学を求めている」といった表現ができるよう  
に、日本語を磨き上げてきたのである。

おかげで、明治期にもわが国は、欧米語で高等教育  
を受け一握りのエリートと、無知な一般大衆とに分  
裂してしまうこともなく、見事に即席の近代化を成し  
とげることができたのだ。しかし、その反面、急  
ぎ過ぎた近代化のつけが、今日、しだいに露呈してき  
てもいるように、日本語の進化の中にも、深刻な負の  
部分が顔を見せ始めていることに、私たちはそろそろ  
気づかねばなるまい。

日本語はこれまで、融通無碍に外国語の影響を取り

込んできた。だが「容易に」取り込めることは、「安  
易に」取り込めることでもあるだろう。そこかしこに  
氾濫している「カタカナ語」や「誤魔化し漢語」－「東  
京都はロードプライシングを実施中」「遺憾の意を表  
し、鋭意専心前向き姿勢で」－などは、今日の私た  
ちの「一知半解」や「思考停止」状態をつぶさに表わ  
しているように思われる。私たちにとって緊急の課題  
は、日本語が今のような状態にあるのか、また、そ  
もそも私たちの言葉とはどのようなものなのか、まず  
はそれらをきちんと把握することであるだろう。世直  
しも未来の青写真も、すべては言葉にかかっている。  
何しろ、言葉は思考そのものなのだから。



【参考文献】

メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』1、2  
竹内、小木、木田、宮本訳、みすず書房 1967-74  
(開架 135.5/メ 理工 135.9/Me66)  
加賀野井秀一『メルロ＝ポンティ ー触発する思想ー』  
白水社 2009  
(開架・理開 135.9/Me66/Ka16)  
ソシュール『一般言語学講義』小林英夫訳、岩波書店 1972  
(中央書庫・理工 801/Sa91)  
加賀野井秀一『知の教科書 ソシュール』講談社 2004  
(開架・理開 801.02/Ka16)  
ミシュレ『海』加賀野井秀一訳、藤原書店 1994  
(開架・理開 299/ミ)  
加藤周一『雑種文化』講談社 1974  
(開架文庫 講談社文庫/か-16-1)

柳父章『翻訳語の論理』法政大学出版局 1972  
(中央書庫 810.4/Y51 理集密 801.7/Y51)  
加賀野井秀一『20世紀言語学入門』講談社 1995  
(開架新書・理開 講談社現代新書/1248)  
加賀野井秀一『日本語は進化する』日本放送出版協会  
2002 (開架・理開 810.2/Ka16)  
加賀野井秀一『日本語を叱る』筑摩書房 2006  
(開架新書・理開 ちくま新書/590)

( ) 内は図書館での配置場所、請求記号を示す  
(編集部)

**利用資格：**どなたでも利用可能

**入館料：**無料（但し、企画展示の観覧は有料）

※常設展示観覧料：一般 200 円、高校生・大学生 150 円

（企画展示の観覧料は内容によって異なります）

**開館時間：**10：00～18：00（入館は17：30まで）

**休館日：**毎週月曜日 ※詳細はホームページをご覧ください。

**サービス：**閲覧（貸出不可）、複写（1枚10円）、撮影（有料、要申請）、

※資料の材質・状態によっては複写ができない場合があります。

**蔵書数：**約8万点

**TEL/FAX：**03-5374-9111/03-5374-9120

**URL：**<http://www.setabun.or.jp/>

**交通アクセス：**京王線「芦花公園」駅南口から徒歩5分

小田急線「千歳船橋」駅から京王バス（歳23系統「千歳烏山」行）「蘆花恒春園」下車、徒歩5分



明治の文豪・徳富蘆花を始め多くの文学者・芸術家が住まいを構え、数々の文学作品の舞台にもなった「世田谷」。『世田谷文学館』は、世田谷区民が、文化的風土を感じさせるこの地で文学に関する知識を深め、教育と文化の振興によって豊かな地域社会を形成することを目的として、1995年に設立されました。蔵書の約7割は、作家の遺族や区民、他機関等からの寄贈によるものです。

同館の「ライブラリー」には、森鷗外・夏目漱石等の日本近代を代表する作家の全集や『群像』『新潮』等の文芸雑誌、文学事典等に加え、世田谷区にゆかりのある作家の作品・全集・研究書及び監督・脚本家の映画やTVドラマの台本といった珍しい資料等も収集しています。その他、自筆資料や戦前の探偵雑誌、大正時代末期から現在までの「キネマ旬報」等の貴重な資料も収蔵しており、原稿・書簡などの自筆資料は、閲覧希望日の1週間前までに閲覧申請手続きを行えば実際に見ることが出来ます（但し、状態・内容によっては閲覧できない資料もあり）。また、約1,200点のビデオ・CD等AV資料には、世

田谷区砧に東宝スタジオ（旧東宝撮影所）があることから東宝製作の文芸映画も含まれており、AVコーナーで視聴することが出来ます。

1・2階「展示室」では、常設展示・企画展示の展覧会が行われます。2005年に開設10周年を記念してリニューアルした常設展示では、世田谷を描いた文学作品をテーマにした『文学に描かれた世田谷100年の物語』の展示、開館以来人気の「ムットーニ」こと武藤政彦氏の製作した自動人形からくり箱『ムットーニのからくり劇場』の上演を行っています。企画展示では、「ライブラリー」と連動した閲覧コーナーが設置されます。また、1階「文学サロン」では、講演会やコンサート、映画の上映会等のイベントを開催しています。『文学館』という堅いイメージがあるかもしれませんが、「文学と映画」、「文学と音楽」、「文学と美術」というように、文学とその他の芸術ジャンルを横断するテーマで展示をしているので楽しんで見て欲しい（同館広報担当）とのことでした。

また、次年度で30回目を迎え、佐佐木幸綱、三田誠広など錚々たる文人が選考委員に名を連ねる『世田谷文学賞』は同館の主催です。受賞者からは何人ものプロが輩出され、文壇への登竜門となっています。文学賞の一環として開かれる特別講座『創作のためのワンポイントアドバイス』では、募集部門の選考委員による講義を受けることが出来ます（抽選、参加費500円）。次年度の募集は、随筆・童話・小説・シナリオの4部門ですが、「世田谷文学館友の会」（年会費1,000円）に入会すれば、世田谷区に在住・通勤・通学していなくても応募可能です。あなたも特別講座で腕を磨いて、力試ししてみたいかがでしょうか。



常設展示「文学に描かれた100年物語」

# 新収資料紹介

① 教職員著作目録 2009.1-2009.8 配架図書一覧 ( )は所属学部等

著者名	書名	出版社	配置場所	請求記号
渥美 東洋 (名誉教授) 著	刑事訴訟法 全訂第2版	有斐閣	開架	327.6/A95
阿部 泰隆 (総合政策学部) 著	実質的法治国家を創造する変革の法理論 (行政法解釈学 1)	有斐閣	開架・中央	323.9/A12
阿部 泰隆 (総合政策学部) ほか 編	自治体の出訴権と住基ネット 杉並区訴訟をふまえて (総合叢書 4)	信山社出版	開架・市ヶ谷	323.96/Ka53
A.M.フェルドマン, R.セラーノ 著 飯島 大邦 (経済学部) 訳	厚生経済学と社会選択論	シーエービー出版	開架	331.7/F18
川島 康男 (経済学部) ほか 飯塚 容 (文学部), 瀬戸 宏 編著	文明戯研究の現在 春柳社百年記念国際シンポジウム論文集	東方書店	中央	772.22/I28
池田 和臣 (文学部) 編 解説	飯島本源氏物語 Iijima-bon Genji Monogatari 1-5	笠間書院	中央	913.36/Mu56
池田 和臣 (文学部) 編 解説	飯島本源氏物語 5 影印	笠間書院	中央	913.36/Mu56
田中 健夫, 石井 正敏 (文学部) 編	対外関係史辞典	吉川弘文館	参考	D210.03/Ta84
石川 鉄郎 (商学部) 編著	資本会計の課題 純資産の部の導入と会計処理をめぐって	中央経済社	開架・中央	336.94/I76
北村 敬子 (商学部) 編著	公共性志向の会計学	中央経済社	開架・中央	336.9/I84
石崎 忠司 (商学部) ほか 編著	現代資本主義と国民国家の変容 (研究叢書 21)	中央大学出版部	開架・中央	332.06/I13
一井 昭 (経済学部) 編著	ポリティカル・エコノミー 「資本論」から現代へ	桜井書店	開架	332.06/I13
渡辺 俊彦 (経済学部) 一井 昭 (経済学部) 著	ゲームの規則 フランス語入門	駿河台出版社	中央	850/I89
伊藤 洋司 (経済学部) 大野 一 道 (経済学部) 著	ローザ・ルクセンブルク思想案内	社会評論社	中央	309.3/I89
金光 仁三郎 (経済学部) 著	ガバナンスの探求 蠅山政道を読む	勁草書房	開架・中央	317.1/I44
渡邊 浩司 (経済学部) 著	基礎行政学 改訂版 (ホーンブック)	北樹出版	開架	317.1/I44
伊藤 成彦 (名誉教授) 今村 都南雄 (法学部) 著	新現代憲法入門 第2版 (現代法双書)	法律文化社	開架	323.14/Y46
今村 都南雄 (法学部) ほか 著	村上春樹と一九八〇年代	おうふう	開架・中央	910.26/Mu43/U9
山内 敏弘 編 植野 妙実子 (理工学部) ほか 著	公法(憲法) 第2版 (新・論議講義シリーズ 1)	弘文堂	開架・中央	323.14/U22
宇佐美 毅 (文学部) ほか 編	日本における貧困世帯の量的把握	法律文化社	中央	368.2/E33
内野 正幸 (法科大学院) 著	会社法 (LEGAL QUEST)	有斐閣	開架	325.2/I89
江口 英一 (名誉教授) ほか 著	観る 宇宙からの出発	芸術現代社	中央	704/O67
大杉 謙一 (法科大学院) ほか 著	コウジの冒険 Les aventures de Koji	駿河台出版社	中央	850/O67
大野 一 道 (経済学部) 著	メルロ＝ポンティ 触発する思想 (哲学の現代を読む 8)	白水社	開架	135.9/Me66/Ka16
金光 仁三郎 (経済学部) 著	契約・事務管理・不当利得 (弘文堂NOMIKA 4-1 債権各論 1)	弘文堂	開架・中央	324.5/Ka72
渡邊 浩司 (経済学部) ほか 著	ADHDとはどんな障害か 正しい理解から始まる支援 最新改訂版	少年写真新聞社	開架	493.937/Ka48
加賀野井 秀一 (理工学部) 著	聖女・悪女伝説 伝説/歴史編 (ムーサの贈り物 Gift of Muse 4)	音楽之友社	開架	723/Ki71
笠井 修 (法科大学院) ほか 共著	リーダー・パワー 21世紀型組織の主導者のために	日本経済新聞出版社	開架・中央	361.5/N99
上林 靖子 (文学部) ほか 共著	ロジスティクスと小売経営 イギリス小売業のサプライ・チェーン・マネジメント	白桃書房	開架・中央	673.7/F21
喜多尾 道冬 (名誉教授) 著	近代製糖業の発展と糖業連合会 競争を基調とした協調の模索	日本経済評論社	中央	588.1/Ku11
ジョセフ・S.ナイ 著 北沢 格 (経済学部) 訳	基本講義民事訴訟法 Illustrational method	信山社出版	開架・中央	327.2/Ko39
ジョン・ファーニー, リー・スパークス 編 木立 真直 (商学部) 訳	災害と江戸時代	吉川弘文館	中央	210.02/E24
佐久間 英俊 (商学部) 編 塩見 英治 (経済学部) ほか 編著	近代中国における民俗学の系譜 国民・民衆・知識人	御茶の水書房	開架・中央	380.1/Ko97
久保 文克 (商学部) 編著	すべて僕に任せてください 東工大モーレッツ天才助教授の悲劇	新潮社	開架	377.21/Ko75
小島 武司 (名誉教授) ほか 編	リレーションナルデータベース教科書 改訂新版	ソフト・リサーチ・センター	開架・中央	549.92/Sa25
江戸遺跡研究会 編	刑法各論 第3版	有斐閣	開架・中央	326.2/Sa25
小林 謙一 (文学部) ほか 執筆	シティマネージャー制度論 市町村長を廃止する	埼玉新聞社	開架	318.1/A29
子安 加余子 (経済学部) 著	現代地方自治	学陽書房	開架・中央	318/Sa75
今野 浩 (理工学部) 著	民事手続法入門 第3版 (有斐閣アルマBasic)	有斐閣	開架	327.2/Sa85
今野 浩 (理工学部) 著	よくわかる刑事訴訟法 (やわらかアカデミズム・「わかる」シリーズ)	ミネルヴァ書房	開架・中央	327.6/Sh32
斎藤 信治 (法科大学院) 著	要件事実・事実認定論と基礎法学の新たな展開 伊藤滋夫先生喜寿記念	青林書院	開架・中央	327.2/Ka94
赤川 貴大 編著	住宅税制論 持ち家に対する税の研究	中央大学出版部	開架・中央	345.1/Sh67
佐々木 信夫 (経済学部) 著	親族 (論点体系判例民法 9)	第一法規	開架・中央	324/R66
工藤 裕子 (法学部) 著	日本百名塔	中央大学出版部	開架	521.81/Su56
佐々木 信夫 (経済学部) 著	新現代労働法入門 第4版 (現代法双書)	法律文化社	開架・市ヶ谷	366.14/Su58
佐藤 鉄男 (法科大学院) ほか 著	民事手続法学の新たな地平 青山善充先生古稀祝賀論文集	有斐閣	開架	327.2/I89
椎橋 隆幸 (法科大学院) 編著	歴史の可能性に向けて フランス宗教戦争期における歴史記述の問題	水声社	開架	235.05/Ta33
河上 正二, 高橋 宏志 ほか 編 執行 秀章 (法科大学院) ほか 執筆	軍勢力と現代外交 現代における外交的課題	有斐閣	開架	319/L37
篠原 正博 (経済学部) 著	刑事法学における現代的課題 (日本比較法研究所研究叢書 77)	中央大学出版部	開架・市ヶ谷	326/Ta16
能見 善久, 加藤 新太郎 編	罪数論の研究	成文堂	開架・市ヶ谷	326.17/Ta16
鈴木 博人 (法学部) ほか 執筆				
須磨 一彦 (名誉教授) 著				
角田 邦重 (法学部) 編				
毛塚 勝利 (法学部) 編				
高橋 宏志 (法科大学院) ほか 編 佐藤 鉄男 (法科大学院) ほか 著				
高橋 薫 (法学部) 著				
ポール・ゴードン・ローレン, ゴードン・A. クレイ, アレクサンダー・L. ジョージ 著				
木村 修三, 滝田 賢治 (法学部) ほか 訳				
只木 誠 (法学部) 著				
只木 誠 (法科大学院) 著				

著者名	書名	出版社	配置場所	請求記号
棚瀬 孝雄 (法科大学院) 編	司法の国民的基盤 日米の司法政治と司法理論	日本評論社	開架・中央	327/Ta85
丹沢 安治 (総合政策学部) 編著	中国における企業と市場のダイナミクス (中央大学政策文化総合研究所研究叢書 9)	中央大学出版部	開架・中央	302.1/C66
鶴田 満彦 (名誉教授) 著	グローバル資本主義と日本経済	桜井書店	開架・市ヶ谷	333.6/Ts87
永井 和之 (法学部) 編著	よくわかる会社法 第2版	ミネルヴァ書房	開架・中央	325.2/N14
野口 貴公美 (法学部), 幸田 雅治 編著	安全・安心の行政法学 「いざ」というとき「何が」できるか?	ぎょうせい	開架・中央	323.9/N93
橋本 基弘 (法学部) ほか 著	よくわかる地方自治法 (やわらかアカデミズム・「わかる」シリーズ)	ミネルヴァ書房	開架・中央	318.1/H38
服部 龍二 (総合政策学部) ほか 編	人物で読む現代日本外交史 近衛文麿から小泉純一郎まで	吉川弘文館	開架・中央	319.1/Sa13
服部 龍二 (総合政策学部) ほか 編	人物で読む近代日本外交史 大久保利通から広田弘毅まで	吉川弘文館	開架・中央	319.1/Sa13
カール・コリーノ 著	ムージル 伝記 1 (叢書・ウニベルシタス 914)	法政大学出版局	開架	940.2/Mu85/C88
早坂 七緒 (理工学部) ほか 訳				
林 茂樹 (文学部) ほか 編著	ネットワーク化・地域情報化とローカルメディア ケーブルテレビの今後を見る	ハーベスト社	開架	699.21/H48
原田 純孝 (法科大学院) ほか 編	本社会と法律学 歴史、現状、展望 渡辺洋三先生追悼論集	日本評論社	開架・中央	320.4/Ka21
日高 克平 (商学部) ほか 編著	グローバリゼーションと経営学 21世紀におけるBRICsの台頭 (現代社会を読む経営学 2)	ミネルヴァ書房	開架・中央	335.1/G34
平野 晋 (総合政策学部) 著	超訴訟社会 モンスター化する「権利主張」と恐怖の連鎖 (コンパクトシリーズ 02)	ビジネス社	開架・中央	327/H66
平野 晋 (総合政策学部) 著	体系アメリカ契約法 英文契約の理論と法務	中央大学出版部	開架・中央	324.953/H66
チームいま好き 著	いまの私が好き	ユック舎	開架	281.04/C45
廣岡 守穂 (法学部) 監修				
藤平 育子 (法学部) 著	フォークナーのアメリカ幻想 『アブサロム、アブサロム』の真実	研究社	開架・中央	930.29/F16/F56
島根県立大学PFI研究会 編	PFI刑務所の新しい試み 島根あさひ社会復帰促進センターの挑戦と課題	成文堂	開架・中央	326.52/Sh42
藤本 哲也 (法学部) ほか 執筆				
保坂 俊司 (総合政策学部) 著	癒しと鎮めと日本の宗教	北樹出版	開架	160.21/H91
星野 智 (法学部) 著	環境政治とガバナンス	中央大学出版部	開架	519.5/H92
升田 純 (法科大学院) ほか 著	モンスタークレーマー対策の実務と法 法律と接客のプロによる徹底対談	民事法研究会	開架・中央	673.3/Ma66
ローラ・Rリンダー 著				
松野 良一 (総合政策学部) 訳	パブリック・アクセス・テレビ 米国の電子演説台 (中央大学学術図書 72)	中央大学出版部	中央	699/L63
丸山 秀平 (法科大学院) ほか 編著	事業承継特例法と事業承継の法務・税務	三協法規出版	開架	335.35/Ma59
ジャン・ボベロ 著	フランスにおける脱宗教性の歴史 (文庫クセジュ 936)	白水社	開架	文庫クセジュ/936
三浦 信孝 (文学部) ほか 訳				
宮野 勝 (文学部) 編著	選挙の基礎的研究 (研究叢書 22)	中央大学出版部	開架・中央	314.8/Mi79
フランク・ローゼンツヴァイク 著	救済の星	みすず書房	開架	199/R72
村岡 晋一 (理工学部) ほか 共訳				
矢島 正見 (文学部) ほか 編著	よくわかる犯罪社会学入門 (改訂版)	学陽書房	開架・中央	326.35/Y16
矢内 一好 (商学部) ほか 著	税務・会計用語辞典 和英用語対照 12訂版	財経詳報社	開架・参考	D336.98/Y54
新井 益太郎 監修				
矢内 一好 (商学部) ほか 共著	現代税法の基礎知識 8訂版	ぎょうせい	開架	345.1/Ki57
山田 昌弘 (文学部) ほか 著	「婚活」時代 (ディスカヴァー携書 021)	ディスカヴァー	開架・中央	367.4/Y19
山田 昌弘 (文学部), 白河 桃子 監修	うまくいく! 男の「婚活」戦略 「図解」10倍効率アップ 何もしないと、結婚できない!	PHP研究所	開架	367.4/Y19
山田 昌弘 (文学部), 白河 桃子 監修	幸せになる! 女の「婚活」バイブル 「図解」リアルにわかる 何もしないと、結婚できない!	PHP研究所	開架	367.4/Y19
山田 昌弘 (文学部) 著	ワーキングプア時代 底抜けセーフティーネットを再構築せよ	文藝春秋	開架	364/Y19
横山 彰 (総合政策学部) ほか 著	現代財政学 (有斐閣アルマ Specialized)	有斐閣	開架・市ヶ谷	341/Y79
渡部 裕亘 (名誉教授) ほか 著	簿記演習講義 第5版	東京経済情報出版	開架	336.91/U75

## Information

### 中央図書館のアスベスト除去工事に伴う臨時閉館について

中央図書館はアスベストを含む天井吹付剤を除去するため、下記の期間臨時閉館させていただきます。図書館利用者と図書館業務従事者の健康と安全を確保するための措置であり、ご理解とご協力をお願いいたします。

**【閉館期間】 2010年2月4日(木)～2010年3月29日(月)**

- ◆ 閉館期間中は、中央図書館の全蔵書が利用できなくなるため、図書・資料のご利用、文献入手につきましては、お早目にお済ませくださいようお願いいたします。
- ◆ 閉館期間中のサービスにつきましては、詳細が決まり次第図書館ホームページおよび図書館内掲示にてお知らせいたします。



## 日時計とロゼッタ・ストーン 小原銀之助と中央大学多摩校地

中央大学多摩校地の池のそばに日時計が置かれている。今からちょうど30年前の1979年、多摩校舎の完成を記念して、その設計を担当した久米設計社から寄贈されたもので、制作したのは、日本の「日時計の王様」、小原銀之助氏である。

小原氏は1898（明治31）年、京都で生まれた。早稲田大学文学部に学び、1927（昭和2）年、平凡社に入社。辞典や美術書の編集作業に従事した。1938（昭和13）年、「日本美術社」を設立し、古美術・骨董専門雑誌、『好古』を発行した。

そのなかで小原氏は西洋庭園の日時計に魅了され、やがて制作まで手がけるようになる。現在、小原氏の遺志を継いで日時計制作を主宰する長女の小原輝子氏のお話によると、銀之助氏はひとたび関心をもつと、とことんまで突きつめないと気がすまない性格の持ち主だった。天才肌にして、職人肌の人物だったようだ。

はじめて小原氏が手がけた日時計は、「時計」としてはほとんど用をなさない「非」時計になってしまった。普通の人ならそこで断念するはずのところを、小原氏はゼロから天文学の勉強をはじめた。1953（昭和28）年のことで、小原氏はすでに55歳。まさに「五十の手習い」だった。

そうして1956（昭和31）年、小原式精密日時計の第一号が完成する。1962年（昭和37）年には、上野の東京国立科学博物館の屋上に小原氏の第七号日時計が設置され、誤差はわずか4秒という精度であることが公式に確認されたのであった。同館に問い合わせたところ、この日時計は平成になってから撤去され、現在はつくば市の倉庫に保管されているとのこと。その後、1983（昭和58）年に亡くなるまでに小原氏の手がけた日時計の数は、およそ400基にもものぼる。この夏、暇にまかせてわたしはそのうちの二つを見学に行った。ひとつは、上野不忍池の弁天島。残念ながら、まわりに木が生い茂り、日時計としての役割はほとんど果たしていなかった。もうひとつは、横浜の「港の見える丘」公園。こちらは輝子氏が補修したもので、現在も立派に「時計」として機能している。

中央大学の日時計は、小原式日時計のなかでは例外的な、「円弧型日時計」と呼ばれるもので、原型は、インド、ジャイプル市の「ジャンタル・マンタル」（天体観測施設）の「サラムート・ヤントラ」（日時計）である。建立したのは、ムガル帝国の支配に協力したジャイ・シング二世・ラージブート王（在位：1699～1743年）。軍人としても為政者としても傑出してこの王は、また天文学にも通じていた。小原氏は、インド政府の文化大臣に手紙で何度も陳情し、ジャンタル・マンタルに関わる文献を入手した。そうして誕生したのが、われらが中大日時計だったのである。

この日時計の制作が機縁で、小原氏は、18世紀末、ナポレオンのエジプト遠征軍が発見し、現在は大英博物館が所蔵するロゼッタ・ストーンのひじょうに精巧につくられた複製を本学に寄贈された。現在、中央図書館のロビーに陳列されているものがそれである。

輝子氏によると、小原氏は古代エジプトの「ヒエログリフ」（聖刻文字）にも強い関心を持ち、わざわざドイツ語のヒエログリフの辞書、全16巻を取り寄せて勉強したのだという。「学ぶ」とは、本来、こういうことなのだとおもう。小原氏ゆかりのこれら二つのモニュメントをみて、いつか、あれこれ思いをめぐらせてみてはどうだろう。

### 参考文献

小原銀之助、「日時計の話」、『日本時計学会誌』、84、1978年。  
神戸淳吉、『太陽をつかまえたー「日時計の王様」小原銀之助物語』、講談社、1985年。

中村好文、『意中の建築』、新潮社、2005年。

矢野道雄、『星占いの文化交流史』、勁草書房、2004年。

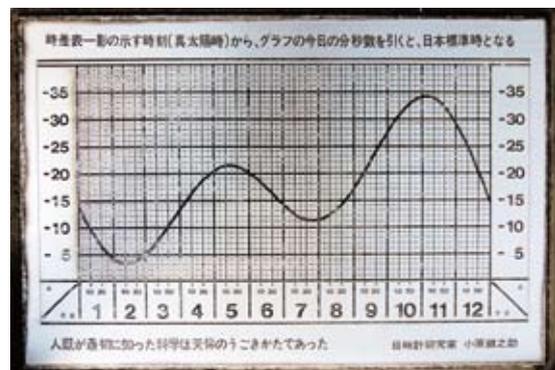
### 〈表紙写真〉

手前は中央大学多摩キャンパスの日時計。奥はワルシャワの壁型日時計。

（写真 Andrzej Barabasz, Wikipedia (2009.10 参照)より, Creative Commons, Attribution ShareAlike 3.0)



多摩キャンパスの日時計  
(2009.10.16 PM13:30 過ぎに撮影)



多摩キャンパスの日時計「時差表」  
(10月15日の場合、日時計の時刻から32分引くと、日本標準時になる)